

白糠の アイヌ語地名

第6回

○シリエド

「シリエド」は、現在の「石炭岬」のことで「シリ（大地の）」と「エド（鼻）」という二つの言葉から「山が海に突き出ている岬」と訳されています。

「シリエド」が「石炭岬」と呼ばれるようになったのは、幕末以降と考えられ、その名が示すとおり、この場所で石炭が掘られたことによります。



国道38号から見た石炭岬

◆北海道石炭採掘創始の地

1854年（安政元年）、徳川幕府は、日米和親条約を締結し下田と箱館（函館）を開港しました。箱館奉行所は、箱館の開港にもない、外国船の燃料として石炭を供給することとなり、蝦夷地内を調査し、シリエドの石炭が有望であるとの結果から、1857年（安政4年）この地に石炭採掘場（炭山）を開きました。

石炭の採掘は、幕府役人の栗原善八を責任者に、江戸から派遣された職人のほか、地元アイヌの人たちによって行われ、後に罪人も20人ほどが使われたという記録が残っています。

そして採炭の様子については、当時の記録から、九州の炭鉱や金山・銀山と同じ方法が採用された本格的なものであったことがわか

記念碑「北海道石炭採掘創始の地」



っています。

・松浦武四郎『東蝦夷日誌』（引用）

「近頃また此上より石炭を掘出し、今盛に掘居る也。其稼方九州邊の掘方と異なる事なし。」

・成石修『東徼私筆』（引用）

「シラヌカ番屋の五六丁前に山腰石炭多し。…山腰二ヶ所に炭穴有り。…当所は穴の丈六尺も有べし、窟中の模様は金銀窟におなじ、所々にかんてらを置たり。」

採掘された石炭は、船で箱館まで輸送されましたが、途中の揺れでくずれてしまうことが多く、炭質も徐々に低下したことから、外国船からしばしば不評を買いました。また、イワナイ（岩内）に新たな炭山が発見されたことにより、シリエドの石炭採掘場は1864

年（元治元年）2月に閉山となりました。本町では、この史実をもとに、石炭岬近くの山の上に記念碑『北海道石炭採掘創始の地』を設けています。

○泊（トマリ）

現在の岬1丁目（オクネップ川から石炭岬まで）辺りは「泊（トマリ）」と呼ばれたところで、現在も町内会名（泊町内会）としてその地名が使われています。

「トマリ」も「湾、入江、港」を意味するアイヌ語地名で、全国各地にあります。この言葉は、日本語が伝わってアイヌ語になった日本伝来語と言われています。



東山公園から望む泊地区と漁港